

## 建築科大行進とその関係資料

青木祐介

### 1. はじめに

日本人建築家として初めてフランスのエコール・デ・ボザール（国立高等美術学校）を卒業し、帰国後の大正 14（1925）年 4 月、横浜高等工業学校に新設された建築学科（現・横浜国立大学都市科学部建築学科）の主任教授に就任した中村順平（1887-1977）は、昭和 25（1950）年に同校を退官するまで、ボザール仕込みの独自の建築家教育を実践した。なかでも、昭和 3（1928）年から同 11（1936）年にかけて同校記念祭で実施された「建築科大行進」は、その課外活動的な性格から、きわめてユニークな実践教育として位置づけられる。

大阪歴史博物館（以下、大阪歴博と表記する）が所蔵する「建築家・中村順平資料」には、横浜高等工業学校時代の教育資料が数多く含まれているが、建築科大行進に関しては、中村自身が手がけたポスターや山車・衣裳のデザイン画などがまとまった形で残されており、建築科大行進の具体的な内容を知ることができる貴重な資料群である。これらの資料は、これまで同館が開催した 3 度の特集展示<sup>1)</sup>で紹介されてきたほか、代表的なものは 2 冊の館蔵資料集『建築家・中村順平資料』『建築家・中村順平資料 2』<sup>2)</sup>に収録されている。

本稿では、大阪歴博が所蔵するこの資料群を中心に、あらたに所蔵が確認された関連資料の情報を整理しながら、中村順平の建築教育において独自の位置を占める建築科大行進について、その内容をあらためて紐解いていきたい。

### 2. 建築科大行進：その概要と背景

建築科大行進は、毎年 11 月に開催される横浜高等工業学校の記念祭において、エコール・デ・ボザールの芸術祭行進「バル・デ・ギャザール（Bal des 4-Z Arts）」にならって建築学科の催しとしておこなわれたもので、昭和 3（1928）年に第 1 回がおこなわれ、昭和 11（1936）年の第 8 回までの開催が確認されている。中村順平が毎年のテーマ設定から、ポスターや山車・衣裳のデザインまでのすべてをコーディネートし、中村のデザインにもとづいて学生たちが大工、塗装、裁縫、その他大道具・小道具などの作業を分担して、製作にあたった。記念祭当日は、それらの衣裳を身にまとった学生たちが総出で横浜の街を練り歩き、大行進は「ハマの名物」と謳われた。

同校建築学科の第一期生である網戸武夫（昭和 3 年卒）は、中村順平の評伝である自著『情念の幾何



図 1 バル・デ・ギャザール当日の学生たち  
（網戸武夫『情念の幾何学』より）

学 形象の作家中村順平の生涯』<sup>3)</sup>のなかで、建築科大行進の原点であるエコール・デ・ボザールの芸術祭行進について、パリのアトリエ前での学生たちの集合写真(図1)とともに、その情熱的な行進の情景を描き出している。

その記述によると、花火が打ち上げられるなか、楽器を囃し立てて山車とともにパリの街を行進してきた学生たちは、群衆をかき分けてパンテオン広場に到着すると、山車に火を放ち、全員がその周りを輪になって踊り狂ったという<sup>4)</sup>。網戸は、このロンド(輪舞)の中にいたであろう若き日の中村が体験した青春の歓喜に想いを馳せ、中村の情熱が投影された「ハマの芸術行進」は、建築家をめざす日本の若者に対する「芸道に祈念する割礼の儀式」であったとする。

実際のところ、上記の写真が撮影された1921年の芸術祭行進の当日、中村本人は盲腸を患って床に伏していたため、行進は目にしていない。大阪歴史博所蔵の中村順平資料には、この年の芸術祭行進について中村が9月5日にパリの下宿で記したメモ<sup>5)</sup>(図2)が残されている。このメモからは、同年の芸術祭行進が6月10日の開催であったこと<sup>6)</sup>、図1の写真は中村がボザール入学前に入所したアトリエ・グロモール・エキスペール(Atelier Gromort et Expert)の前で撮影されたものであること、写っているのはそのアトリエの学生たち

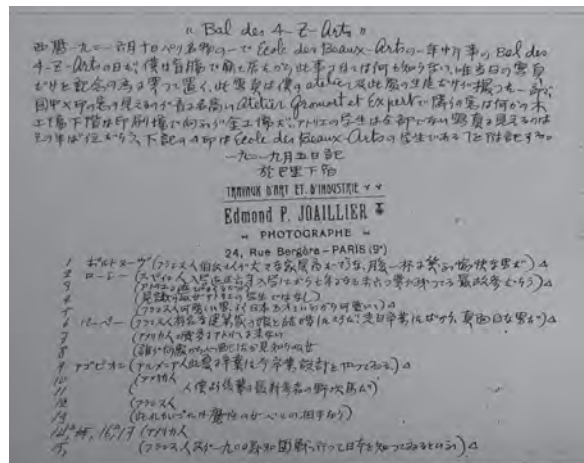


図2 1921年の芸術祭行進に関する中村順平のメモ(大阪歴史博物館所蔵)

であること、中村は当日の行進の様子を見ていないため、記念にこの写真を買ったことなどが記されている。メモの中ほどに名前があるパリ9区ベルジュール通り24番地の写真家エドマン・ジョワイエ(Edmond P. Joaillier)は、上記の写真を撮影したカメラマンとみてよいだろう。

メモには、この写真に写っている17人に対する中村のコメントが記されている。フランス人以外にもスペイン人・アメリカ人・アルメニア人の名前が書かれており、アトリエには欧米各国から学生が集まってきていることがわかる。一方で、ボザールの学生はコメントの右端に△が付けられている6人だけで、「アトリエに遊びにくるだけ」「見識らぬ女」と書かれている人物もおり、芸術祭の行進には、ボザール所属の学生以外に、こうしたボザールと関係の深いアトリエの学生をはじめ多彩な顔触れが入り交じっていたようである。

また網戸は、前述の評伝『情念の幾何学』のなかで、建築科大行進を支えた中村の情熱のもうひとつの背景として、中村が盛んに足を運んでいた同時代の演舞場のレビュー(revue)の存在を指摘している<sup>7)</sup>。1930年代に全盛を迎えるレビューと建築科大行進との親近性を見て取った網戸は、大行進が中村の「演出家たる挑戦の上に華咲いた」と分析するが、大行進がもつ「俗」性を時代の熱気から捉え返した視点として、きわめて興味深い。

全8回の建築科大行進の主題・風俗・山車の内容については、網戸著『情念の幾何学』のもとになった『建築知識』誌上での連載「建築家外伝 中村順平」<sup>8)</sup>のなかでまとめられており、それを

一覧表にしたものが（表1）である。風俗や山車についての説明は、網戸による表現をそのまま引用した。

大行進は、昭和3（1928）年に第1回がおこなわれたあと、1年空けて、昭和5（1930）年からは毎年開催されてきたが、昭和12（1937）年は、同年7月に日中戦争が勃発したことを受けて、記念祭の内容が大幅に縮小されたため、大行進は実施されていない。そして同年以降、記念祭で建築科大行進がおこなわれることはなくなった<sup>9)</sup>。昭和15（1940）年のみ、全国的におこなわれた紀元2600年奉祝行事の一環として行進が復活しているが、このときは従来の創作スタイルではなく、時局を反映して、歩兵隊と音楽隊、日の丸を立てた豪華船による行進として実施している。具体的には、11月10日に横浜市民奉祝行進に参加するかたちで市中を行進し、さらに14日には東京へ進出して、数寄屋橋から靖国神社までを行進した<sup>10)</sup>。

表1 建築科大行進の概要

	開催年		主題	風俗	山車
第1回	1928	昭和3年	天壤無窮	ギリシャ時代	王朝風の鶏首の船にギリシャの武士が槍をかざして乗る
第2回	1930	昭和5年	ARS LONGA	アテネ祭	天馬に乗ったギリシャ武士
第3回	1931	昭和6年	精神文化之勝利	14世紀	ゴシック寺院（アルスの玉座）
第4回	1932	昭和7年	光ハ東方ヨリ	ナポレオン時代	「建築の玉座」に座すナポレオン。「NEO NIPPON」の文字が見える
第5回	1933	昭和8年	大アジア主義	秀吉の軍勢とエチオピア軍勢、これに配するアジア諸民族の風俗	象に乗る秀吉。象は竹箆紙貼り
第6回	1934	昭和9年	文芸復興	ルネッサンス	唯物思想の墓
第7回	1935	昭和10年	日本文化ノ独立 (副題/光あれ)	古代ギリシャ	船上のゼウス（左右から奴隷が動かす）
第8回	1936	昭和11年	芸術之歓喜	15世紀	プラスバンド、松明、槍、タンバリンの男、アコーディオン奏者、旗持ち踊り手等

\* 網戸武夫「中村順平のカラースキーム」『建築知識』（昭和56年1月号）より作成

### 3. 大阪歴史博物館所蔵の建築科大行進関係資料

冒頭で紹介したとおり、大阪歴博に収蔵されている建築科大行進の関係資料は、中村順平自らが描いたポスターの原画、山車や衣装のデザインなどの原資料であるが、いずれも中村の弟子たちの手元に残されていた資料であり、これらが段階的に同館に寄贈されてコレクションを形成してきた点が、資料群としての中村順平資料の最大の特徴といえる。

本節では、大阪歴博所蔵の建築科大行進関係資料について、その全体像を把握するとともに、資料種別ごとに概要を紹介していきたい。

同館所蔵の建築科大行進関係資料を、寄贈者別に年代順に一覧表にしたものが、次頁の（表2）である。左端の「番号」欄には、寄贈者別に整理された資料番号を記入し、右端の「資料集」欄には、同館が発行した2冊の館蔵資料集『建築家・中村順平資料』および『建築家・中村順平資料2』に掲載されたものについて、その図版番号を示した。『建築家・中村順平資料』を1、『建築家・中

村順平資料2』を2として、たとえば『建築家・中村順平資料』の図版番号20の資料は、「1-20」と記載した。

表2 大阪歴史博物館所蔵・建築科大行進関係資料

番号	資料名	点数	資料集
平成18年度 檜の会（代表：松本陽一氏）寄贈			
8	横浜高工記念祭「コスチーム」水彩画	4	1-21
9	横浜高工記念祭「藝術之歓喜 山車」水彩画	1	1-20
10	横浜高工記念祭 ポスター原画「藝術之歓喜」	1	1-19
11	横浜高工記念祭「大アジア主義」象の山車	1	1-17
12	横浜高工記念祭「コスチーム 僧侶など」水彩画	1	1-18
平成25年度 歌壽春子氏寄贈			
13	横浜高等工業学校 第七回建築科大行進「日本文化ノ独立」ポスター	1	
14	横浜高等工業学校 第八回建築科大行進「藝術之歓喜」ポスター	1	
15	横浜高等工業学校 昭和十年度第七回記念祭行進曲総符	1	2-28-3
16	横浜高等工業学校記念祭芸術行進『日本文化の独立』順路	1	2-28-1
17	横浜高等工業学校記念祭芸術行進『日本文化の独立』英文案内	1	2-28-2
18	新聞切抜（横浜高等工業学校芸術祭）	7	
平成27年度 松本陽一氏寄贈			
6	横浜高等工業学校 第四回建築科大行進「光ハ東方ヨリ」ポスター原画 中村順平画	1	2-19
7	横浜高等工業学校 第四回建築科大行進「光ハ東方ヨリ」山車「建築の玉座」デザイン 中村順平画	1	
8	横浜高等工業学校 第五回建築科大行進「大アジア主義」ポスター	1	
9	横浜高等工業学校 第五回建築科大行進「大アジア主義」山車のデザイン 中村順平画	1	2-20
10	横浜高等工業学校 第五回建築科大行進「大アジア主義」衣裳デザイン 中村順平画	1	
11	横浜高等工業学校 第六回建築科大行進「文藝復興」ポスター	1	2-21
12	横浜高等工業学校 第六回建築科大行進「文藝復興」山車のデザイン 中村順平画	1	2-22
13	横浜高等工業学校 第六回建築科大行進「文藝復興」衣裳デザイン 中村順平画	2	2-23,24
14	横浜高等工業学校 第七回建築科大行進「日本文化ノ独立」ポスター	1	2-25
15	横浜高等工業学校 第七回建築科大行進「日本文化ノ独立」ポスターゲラ	1	
16	横浜高等工業学校 第七回建築科大行進「日本文化ノ独立」山車のデザイン 中村順平画	1	2-26
17	横浜高等工業学校 第七回建築科大行進「日本文化ノ独立」山車・衣裳デザイン 中村順平画	1	2-27
18	横浜高等工業学校 第八回建築科大行進「藝術之歓喜」大道具・衣裳デザイン 中村順平画	1	2-30
19	横浜高等工業学校 第八回建築科大行進「藝術之歓喜」衣裳デザイン 中村順平画	3	2-29

表内に示したとおり、主だった建築科大行進関係資料については、上記2冊の館蔵資料集に資料画像とともに詳しく解説されているので、ここでは寄贈者ごとの資料のまとまりに着目して、若干の説明を加えておきたい。

最初の資料群は、中村順平の弟子たちによって設立された「檜の会」から平成18（2006）年度



に寄贈されたもので、平成 21（2009）年に発行された『建築家・中村順平資料』に掲載されている建築科大行進の資料は、すべてこの資料群に属する。第二の資料群である歌寄春子氏寄贈資料は、昭和 13（1938）年の卒業生である歌寄昌太の旧蔵資料であり、第三の資料群である松本陽一（昭和 17 年卒、元檜の会代表）の旧蔵資料とあわせて、これら新規寄贈資料からのものは『建築家・中村順平資料 2』に収録された。

檜の会は、昭和 57（1982）年 5 月、馬車道十番館で開催された「中村順平忌」の場で結成が決議され、同年 11 月に第 1 回集會が開かれた<sup>11)</sup>。世話人代表には、第一期生である網戸武夫（昭和 3 年卒）が就任し、以後、会誌の発行や土曜会の開催などの活動を継続的にこなってきた<sup>12)</sup>。昭和 62（1987）年 6 月には、同会が中心となって、横浜市民ギャラリーで「建築家中村順平生誕百年記念回顧展」が開催され、建築科大行進のポスターをはじめとする中村順平の関係資料が、中村の没後、初めて国内の展覧会の場で公開された。

ただし、資料の存在そのものは、前述の網戸武夫による連載「建築家外伝 中村順平」のなかで紹介されており、第 27 回<sup>13)</sup>には「中村順平のカラースキーム」として、大行進のポスター 5 点、山車および衣裳のデザイン画 6 点の計 11 点が掲載されている。これらの資料を、大阪歴博所蔵資料（表 2）と照合すると、ポスター 5 点の内容は、檜の会 10（檜の会寄贈資料の資料番号 10 を示す）、檜の会 11、松本 6（松本陽一氏寄贈資料の資料番号 6 を示す）、松本 11、松本 14、そしてデザイン画 6 点の内容は、檜の会 12、松本 7、松本 10、松本 13、松本 16、松本 18 であり、同誌で紹介された資料は、段階的な寄贈を経て、すべて大阪歴博に収蔵されていることが確認できる。

さて上記資料のうち、ポスターおよびデザイン画について、建築科大行進のテーマ別に整理したものが、下記（表 3）である。

表 3 建築科大行進関係資料の開催回別内訳

	開催年	主 題	ポスター	山車デザイン	衣裳デザイン
第 1 回	1928 昭和 3 年	天壤無窮			
第 2 回	1930 昭和 5 年	ARS LONGA			
第 3 回	1931 昭和 6 年	精神文化之勝利			
第 4 回	1932 昭和 7 年	光ハ東方ヨリ	松本 6	松本 7	
第 5 回	1933 昭和 8 年	大アジア主義	檜の会 11、松本 8	松本 9	松本 10
第 6 回	1934 昭和 9 年	文芸復興	松本 11	松本 12	檜の会 12、松本 13
第 7 回	1935 昭和 10 年	日本文化ノ独立	歌寄 13、松本 14、15	松本 16	松本 17
第 8 回	1936 昭和 11 年	芸術之歓喜	檜の会 10、歌寄 14	檜の会 9	檜の会 8、松本 18、19

この表からわかるように、第 1 回から第 3 回までの大行進については、現在までのところ、ポスターおよびデザイン画の存在が確認されていない。各回とも衣裳・山車のテーマが設定されていることから、第 4 回から制作が始まったということは考えにくく、中村順平の没後、網戸武夫が関係資料の紹介を始めた当初の段階から、最初の 3 回分が欠落していたことになる。この点の解明は、今後の資料調査の課題のひとつとなろう。

ポスターについては、第4回から第8回までの各回のもものが揃っているが（図3）、第5回「大アジア主義」は2枚、第7回「日本文化ノ独立」は3枚、第8回「芸術之歓喜」は2枚と、複数枚が収蔵されているものもある。これら複数枚を比較検討したところ、版によるデザインの違いなどは認められず、いずれも同じデザインである。このうち（松本15）は、資料名が「ポスターゲラ」となっているとおり、刷り上がったポスターに中村順平の修正指示とみられる鉛筆書きの跡が確認できる。また（檜の会10）は、資料名には「ポスター原画」とあるものの、原資料を確認した限りにおいては、原画ではなく印刷されたポスターであった。

当時どれだけの枚数のポスターが刷られていたのか、その工程を含めて詳しいことは不明であるが、横浜高等工業学校内の出版部にて、学生たちによって刷られていたものであろう。



(上左) 第4回「光ハ東方ヨリ」  
 (上中) 第5回「大アジア主義」  
 (上右) 第6回「文芸復興」  
 (下左) 第7回「日本文化ノ独立」  
 (下右) 第8回「芸術之歓喜」

図3 建築科大行進ポスター（大阪歴史博物館所蔵）

デザイン画については山車および衣裳の2種類に大別される（図4）。山車のデザイン画は、第4回から第8回までの各回のもものが揃っており、一枚の紙面に正面・側面・背面・平面の4つの図がレイアウトされている。山車のデザインだけでなく、車両の構造も含めて図面化されており、余白には大行進のテーマと年代、中村の署名が鉛筆書きされている。プレゼンテーション図としてほぼ完成段階のものから、彩色が未完成のもの、余白に鉛筆書きのデッサンが書き込まれた状態のもの



まで、仕上がり状態にはばらつきが認められる。

衣裳のデザイン画には、各登場人物の衣裳に加えて、横断幕などの大道具・小道具類もあわせて描かれており、山車の図と一緒にになっているものもある。山車のデザイン画と同じく、紙面には中村順平の署名と年号が鉛筆で書き込まれている。

これらの衣裳デザイン画は、その内容から各回で複数枚が制作されたと考えられるが、大阪歴博所蔵資料では、第5回「大アジア主義」のものが1点、第6回「文芸復興」が3点、第7回「日本文化ノ独立」が1点、第8回「芸術之歓喜」が6点と、収蔵点数にはばらつきがある。したがって、今後あらたな衣裳デザイン画が発見される可能性は高く、それを示唆する事例として、横浜都市発展記念館所蔵の市原隆夫旧蔵資料について紹介しておきたい。

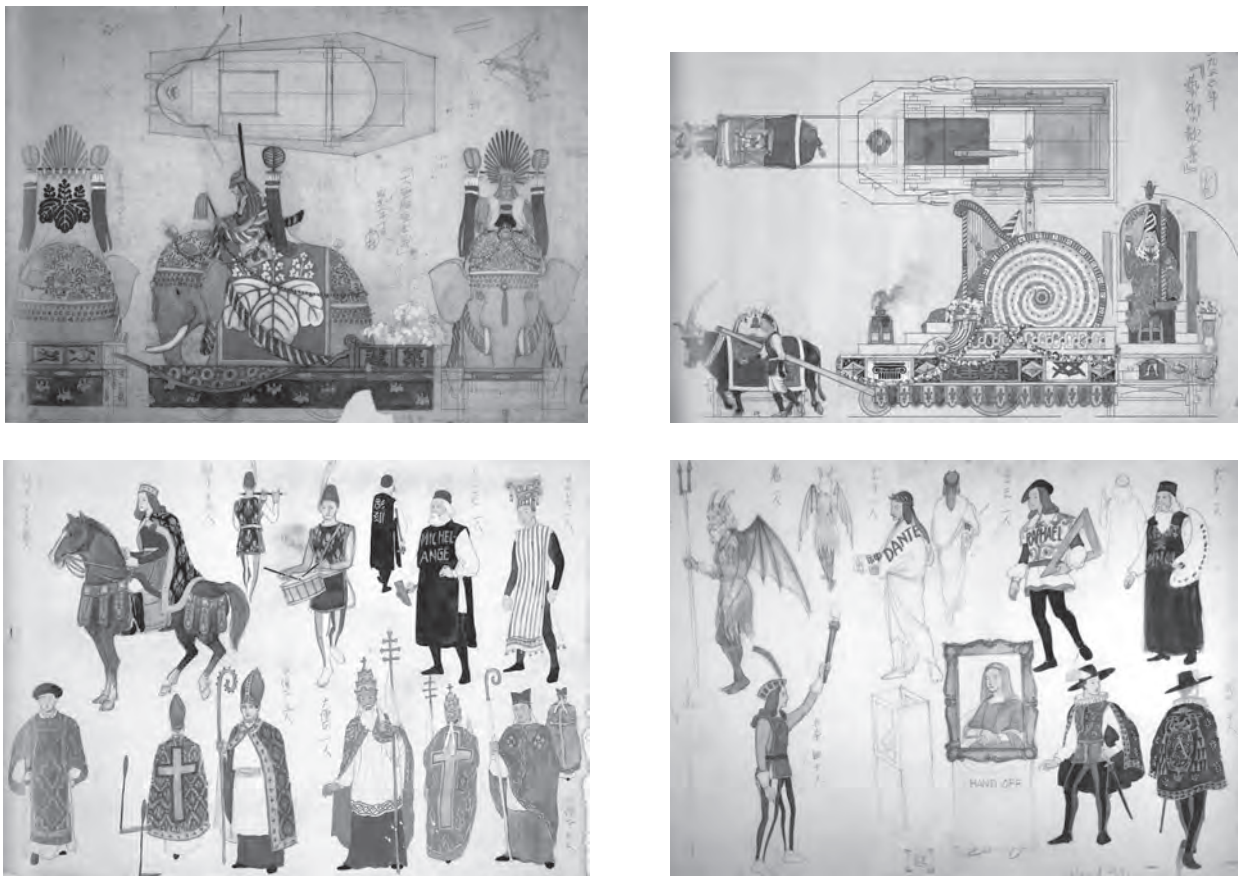


図4 中村順平によるデザイン画（大阪歴史博物館所蔵）  
 （上左）第5回「大アジア主義」山車（上右）第8回「芸術之歓喜」  
 （下2点）第6回「文芸復興」

横浜都市発展記念館では、令和元（2019）年に、横浜高等工業学校建築学科の卒業生である市原隆夫（昭和13年卒）の旧蔵資料48点の寄贈を受けた<sup>14)</sup>。その内容は、中村の弟子たちの間で共有されていた原画やスケッチ、写真等の複写資料が中心であったが、そのなかに大阪歴博に収蔵されていない大行進の衣裳デザイン画3点の複写写真を確認することができた<sup>15)</sup>（図5）。

いずれも116mm×166mmの小キャビネサイズで、市原隆夫旧蔵資料には、こうした複写写真が計35点含まれていた。写真は大阪の写真館から市原宛に送られてきた封筒に入れられており、消印の日付が昭和53（1978）年8月であることから、前年3月に中村順平が亡くなった後、大阪

の中村家にあった資料に対して弟子たちの間で何らかの調査の動きがあり、その経緯で撮影されたものと想像される。おそらく当初はすべての資料が揃っていたはずであるが、時間の経過のなかで、分散してしまったものと思われる。この未発見資料の所在を確認することも、今後の資料調査の課題のひとつである。



図5 オリジナル未確認の衣裳デザイン画（市原徹氏寄贈・横浜都市発展記念館所蔵）

ポスター、デザイン画以外の大行進関係資料としては、歌寄春子氏寄贈資料のなかに、第7回「日本文化ノ独立」の行進曲楽譜、および順路案内（日本語・英語表記）がある（図6）。これら3点は『建築家・中村順平資料2』で紹介されているが、いずれも一枚物で、その体裁からみて、大行進のポスター同様に、校内出版部で学生たちによって刷られたものであろう。順路案内では、校舎を出発したのち伊勢佐木町を抜けて関内へと向かい、その中心部で折り返して、また校舎へと戻るルートがわかる。

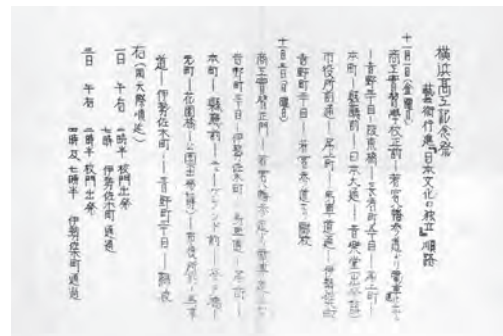


図6 第7回「日本文化ノ独立」順路案内（大阪歴史博物館所蔵）

同じく歌寄春子氏寄贈資料のなかに、大行進の開催を伝える新聞記事の切抜7点が含まれる。年代不明のもの1点をのぞいて、内訳は昭和9（1934）年の記事1点、昭和10（1935）年の記事3点、昭和11（1936）年の記事2点である。いずれも寄贈資料に含まれるポスターと同年代の新聞記事である。

以上、檜の会および同会メンバーの旧蔵資料のほか、建築科大行進の状況を伝える資料として、横浜高等工業学校内で発行されていた校内新聞『横浜高工時報』がある。同紙は大正14（1925）年1月15日に第1号が発行され、終戦直前の昭和19（1944）年4月28日の第399号まで続いた。当初は学生有志による月1回程度の発行であったが、経営が厳しくなったことで、大正15（1926）年4月15日の第28号からは、同校校友会出版部の手で発行されることになった<sup>16)</sup>。

大阪歴博では、同紙の昭和10（1935）年度版～同12（1937）年度版の3年分の復刻版を所蔵しており、昭和10年度版には昭和10（1935）年2月から同11（1936）年2月までの1年分が、11年度版には同年3月から9月までの半年分が、12年度版には昭和12（1937）年3月から同13（1938）年3月までの1年分が収録されている。復刻版の表紙には「昭和62年度再版」とあることから、



昭和 62（1987）年の中村順平生誕百年の機会に刊行されたと思われるが、復刻版には発行者の記載がなく、発行の経緯や使用した原本など詳細は不明である。

その他、横浜国立大学附属図書館でも、同紙の一部（第 122 号から第 154 号）を所蔵しているが、令和元（2019）年の調査時には原本所在不明とのことで確認できなかった<sup>17)</sup>。

復刻版に収録された昭和 10（1935）年からの 3 年分を見るかぎり、同紙は 4 頁の体裁で隔週水曜日に発行されている。建築科大行進については、毎年秋の記念祭の開催前後に、中村順平による山車や衣裳のデザイン画とともに紹介されている（図 7）。

次節では、あらたに所在が判明した関係資料の調査成果をふまえて、各回の大行進の詳細について、当時の状況を記録した写真資料を中心に見ていきたい。



図 7 『横浜高工時報』に掲載された建築科大行進の記事  
(大阪歴史博物館所蔵復刻版より)

#### 4. 写真にみる建築科大行進

本節では、第 1 回から第 8 回までの建築科大行進の状況について、写真資料を中心に紹介する。

大行進当日の写真については、公式な記録としては残されておらず、関係者および各所蔵機関のところに分散して残されているうえ、写真の多くは弟子たちの間で複写して共有されているため、オリジナルの確認を含めてすべてを把握することは難しい。本調査では、大阪歴博所蔵の中村順平資料に加えて、関係者の手元に残されていた資料から下記の 2 件を閲覧した。

- ・市原隆夫旧蔵資料（横浜都市発展記念館所蔵）
- ・平尾榮美旧蔵資料（日本郵船歴史博物館所蔵）

前者は、前節で紹介したとおり、中村の教え子である市原隆夫（昭和 13 年卒）の旧蔵資料で、写真はすべて複写資料であるが、そのなかに大行進当日の写真が含まれている<sup>18)</sup>。また原所蔵者である市原家には、オリジナル写真が貼られた貴重なアルバムが 1 冊残されている。

後者も、教え子の一人である平尾榮美（昭和 18 年卒）の旧蔵資料で、日本郵船歴史博物館では、この他に大西春雄（昭和 17 年卒）の旧蔵資料も収蔵している。本調査では、青木による準備調査ののち、平成 30（2018）年 12 月 23 日に海老名熱実氏・林要次氏・青木の 3 名で、平尾榮美旧蔵資料から写真資料を中心に 20 件を閲覧した。同資料には多くの写真資料が含まれており、閲覧したのは一部の資料だけであるが、本調査では、建築科大行進の関係写真を一冊にまとめた写真アルバムを確認することができた<sup>19)</sup>。

背表紙に「記念祭」と書かれたシールが貼られたこのアルバムは、平尾自身が各回の建築科大行進のポスターやデザイン画の複写写真、そして大行進当日の記録写真を台紙に貼り付けて年代順にまとめたもので、一冊のリングファイルに綴じられている（図 8）。本節では、この写真アルバム（以下、平尾アルバムと表記する）を基本資料とし、市原隆夫旧蔵資料に含まれる写真資料（以下、市原写真と表記する）等、その他資料を適宜交えながら、各回の大行進を見ていきたい。



図8 平尾榮美旧蔵写真アルバムより (日本郵船歴史博物館所蔵)

### （0）記念祭（大正 14-15 年）

はじめに、建築科大行進の舞台となった横浜高等工業学校の記念祭について、校史の記述をもとに簡単に触れておきたい。

同校の記念祭が初めて開催されたのは、大正 10（1921）年 10 月 29 日～31 日のことで、「校内を開放し、学園と一般市民との交流をはかり、あわせて工業知識の普及につとめる」という趣旨であった<sup>20)</sup>。建築科が記念祭に参加するのは、同科が新設された大正 14（1925）年からであるが、初めて参加したこの年は「校舎に船首と船尾をくっつけて大海賊船に仕立て、さすが建築科なるかなと感心させた」という。また網戸武夫は『情念の幾何学』のなかで、同年の記念祭について「一年生のみ少数ながら、正門中心軸上に中村教授指導によるオベリスクを建ち上げて、学園祭をひととき賑々しく飾った」<sup>21)</sup>と回想している。

平尾アルバムは、この大正 14（1925）年の記念祭から始まっており、建築科の創作になるオベリスクと大海賊船の写真が残されている（図 9）。これらの写真から、大海賊船は校舎を船体に見立て棟方向の前後に船首と船尾を付けた、壮大なスケールの創作であったことがわかる。

また翌大正 15（1926）年には、正門前に歓迎塔としてエッフェル塔を建て、加えて「芸術行進なる一大デモンストレーションを行ない、市内をねって歩き市民をアツといわせた」という<sup>22)</sup>。このときの写真は現時点で確認できていないものの、先の大海賊船の造形といい、市内を練り歩く芸術行進といい、大正時代末期の記念祭から、すでに建築科大行進のプロトタイプが実施されていた点は見逃すことができない。



図 9 大正 14（1925）年の記念祭での建築科創作（日本郵船歴史博物館所蔵）

### （1）第 1 回「天壤無窮」（昭和 3 年）

前節で見たとおり、第 1 回から第 3 回までの大行進については、これまでポスターや山車・衣装デザインなどの関係資料が確認されておらず、残された写真資料は当日の様子を知ることができる貴重な手がかりである。

昭和 3（1928）年に開催された最初の建築科大行進のテーマは「天壤無窮」で、日本書紀を典拠とした永遠を意味する語彙であるが、山車・衣装のモチーフは日本ではなく、西洋の古代ギリシャである。「王朝風の鶏首の船にギリシャの武士が槍をかざして乗る」という山車のデザインは、大正 14（1925）年の記念祭でみられた校舎と一体化した船の造形を、市街を練り歩くことを前提と



した移動式の形態に変換したものと言えるだろう。平尾アルバムには、このときの山車の写真が残されている（図10）。

（2）第2回「ARS LONGA」（昭和5年）

昭和5（1930）年に開催された第2回大行進のテーマは「ARS LONGA」。古代ギリシャの医学者ヒポクラテスに由来する言葉「芸術は長く、人生は短し（Ars longa, vita brevis）」の前半部分を引用したものである。ここでも主題のとおり、山車と衣裳のモチーフは古代ギリシャで、山車のデザインは「天馬に乗ったギリシャ武士」である。

平尾アルバムには、学生たちの集合写真1点しか貼られていないが（図8）、学生たちの背後に、天馬の形状をした山車を確認することができる。また市原写真のなかにも、この天馬の山車をクローズアップするように、同じ写真を拡大してトリミングしたものがある（図11）。



図10 第1回「天壤無窮」山車  
（日本郵船歴史博物館所蔵）



図11 第2回「ARS LONGA」山車  
（横浜都市発展記念館所蔵）

（3）第3回「精神文化之勝利」（昭和6年）

昭和6（1931）年に開催された第3回大行進のテーマは「精神文化之勝利」。それまでの2回が古代ギリシャの時代を主題としていたのに対して、第3回はヨーロッパ中世の時代を主題とする。山車のデザインは「ゴシック寺院（アルスの玉座）」で、中世のゴシック様式特有の尖頭アーチやフライング・バットレスなどで構成された玉座を中央に据えた造形となっている。この第3回大行進も残された写真は少ないが、平尾アルバムにはない山車の写真および行進風景の写真の複写2点が、市原写真に含まれている（図12）。



図12 第3回「精神文化之勝利」山車および行進風景（横浜都市発展記念館所蔵）

（4）第4回「光ハ東方ヨリ」（昭和7年）

昭和7（1932）年に開催された第4回大行進のテーマは「光ハ東方ヨリ」。この回からはポスターおよび山車・衣裳のデザイン画が残されており、ポスター（図3）からは、この年の主題と時代設定（ヨーロッパ近世）に加えて、行進が11月1日と3日の2回おこなわれたこともわかる。

平尾アルバムに収められた写真は、横浜高等工業学校を出発して伊勢佐木町などを行進している風景と学生たちの集合写真が中心で（図13）、「建築の玉座」に座すナポレオン」と題された山車の造形がはっきりとわかるものは少ない。一方で、市原写真のなかに、「NEO NIPPON」の文字を冠した山車と、その脇に立つ中村順平が写った一枚がある（図14）。



図13 第4回「光ハ東方ヨリ」行進風景（日本郵船歴史博物館所蔵）



図14 同左 山車  
（横浜都市発展記念館所蔵）

（5）第5回「大アジア主義」（昭和8年）

昭和8（1933）年に開催された第5回大行進のテーマは「大アジア主義」。これまでのヨーロッパ古代・中世・近世と続いてきた時代設定から、アジアへと大きくテーマを転換させた。ポスターは象に乗る豊臣秀吉を描いたもので、平尾アルバムの写真（図15）に見るかぎり、「竹箆紙貼り」のダイナミックな象の山車は、中村の手になるデザイン画の図案（図4）どおりに仕上げられたことがわかる。



図15 第5回「大アジア主義」山車および衣裳（日本郵船歴史博物館所蔵）

（6）第6回「文芸復興」（昭和9年）

昭和9（1934）年に開催された第6回大行進のテーマは「文芸復興」。時代設定は再びヨーロッパ近世に戻った。山車の主題は「唯物思想の墓」で、ポスターに劇的に描かれているように、石棺の

上に置かれた書物（「唯物思想」）に剣が突き立てられる刺激的な造形である。石棺を覆う天蓋は古典主義様式でまとめられており、その造形の細部は、山車と中村順平と一緒に写った市原写真の1枚から確認できる（図18）。またルネサンス期の人物をモチーフとした衣裳も、デザイン画に描かれたとおりに仕上げられたことが、平尾アルバムに収められた行進風景から確認できる（図17）。

この年の大行進については、横浜で発行されていた写真報道誌『横浜グラフ』<sup>23)</sup>の11月3日の記事に、伊勢佐木町を行進する様子が掲載されており（図16）、同じ写真が平尾アルバムにも収められている。



図16（左）第6回「文芸復興」行進風景（『横浜グラフ』掲載、横浜都市発展記念館所蔵）  
 図17（中）同上 行進風景（日本郵船歴史博物館所蔵）  
 図18（右）同上 山車と中村順平（横浜都市発展記念館所蔵）

（7）第7回「日本文化ノ独立」（昭和10年）

昭和10（1935）年に開催された第7回大行進のテーマは「日本文化ノ独立」。日本文化をタイトルに掲げながら、時代設定や山車・衣裳のテーマは再び古代ギリシャへと回帰している。山車のデザインは、古代ギリシャの軍船にゼウスが乗るもので（図19）、兜をかぶり盾を構えたギリシャ兵士と鼓笛隊が周囲を固める。大阪歴史博所蔵の中村順平資料では、歌嵜春子氏寄贈資料のなかの一冊のスクラップブック<sup>24)</sup>に、この年の大行進の学生たちの集合写真が含まれている（図20）。



図19 第7回「日本文化ノ独立」山車  
 （日本郵船歴史博物館所蔵）

図20 同左 集合写真（大阪歴史博物館所蔵）

（8）第8回「芸術之歓喜」（昭和11年）

昭和11（1936）年に開催された第8回大行進のテーマは「芸術之歓喜」。この年の大行進は、網戸武夫の回想によると、「例年とは趣を変えて躍動する舞台の乱舞を街頭に展開しようと、日劇ダンスチームの益田隆から振付けを受け」たもので、レオポルド作曲の「おもちゃの兵隊」が踊



りの主題曲として設定され、楽器は「太鼓、トランペット、トロンボーン、ホルネット、笛、タンバリン、それに真鍮パイプを釣った即席の楽器」も加わって、大変賑やかな内容であった<sup>25)</sup>。行進の終幕披露となったホテルニューグランドでは、外国人宿泊客の喝采を浴びるなど、結果的にこの年が最後の開催となった建築科大行進のクライマックスともいえる年であった。

デザイン画にあるように、山車は牛に引かせるもので（図4）、平尾アルバムには実際に牛が山車を引いている写真が残されている（図21）。また市原家に残されている市原隆夫旧蔵写真アルバムには、山車の上でおどける中村順平の写真が収められている（図22）。



図21 第8回「芸術之歓喜」山車  
（日本郵船歴史博物館所蔵）



図22 同左 行進風景および山車の上の中村順平（市原徹氏所蔵）



## 5. おわりに

以上、中村順平の建築家教育において独自のプログラムとして知られる建築科大行進について、大阪歴博所蔵資料を中心に、あらたに所在が確認できた資料を加えて、その内容を明らかにした。本稿では、現在確認できる建築科大行進の関係資料すべてを紹介できたわけではないが、資料の所在状況もふまえた全体像と、今後の調査課題の見通しは示せたことと思う。

資料の残存状況からすると、昭和3（1928）年の第1回から昭和6（1931）年の第3回までの資料が圧倒的に少ない。とくにこれまで存在が確認されていないポスターやデザイン画については、今後の資料調査の大きな課題となるであろう。

また中村順平資料の大きな特徴として、オリジナル資料が弟子たちのあいだに分散して伝えられてきたことに加えて、多くの複写資料としても共有されている点が挙げられる。本稿で紹介した市原隆夫旧蔵資料などはその一例であり、複写資料のなかに未発見の資料が確認される可能性を考えれば、今後の資料調査では、複写資料にも丁寧に目を配らなければならない。

現在、中村順平資料については、大阪歴博所蔵資料を核としながら、市原隆夫旧蔵資料（横浜都市発展記念館所蔵）や平尾榮美旧蔵資料（日本郵船歴史博物館所蔵）を含めて、弟子たちのあいだに分散していた資料が少しずつ蓄積されている状況であるといえる。酒井一光は、今後の課題として「個人が所蔵する資料の解明」を指摘しているが<sup>26)</sup>、こうした個人所蔵の資料調査を重ねていくことで、大阪歴博所蔵資料の位置づけを補完することができ、また中村順平研究のあらたな可能性が開けていくことと思われる。

最後に、本共同研究への参加の機会をくださった大阪歴史博物館、共同研究者として数多くのご教示を賜った故・酒井一光氏、海老名熱実氏、林要次氏、資料調査に多大なご協力をいただいた市原徹氏、日本郵船歴史博物館の遠藤あかね氏、鈴木久美子氏に、この場を借りて御礼申し上げます。酒井一光さんに最後にお目にかかったのは、酒野晶子先生にインタビューをおこなった平成30年5月24日でした。心配の表情を隠せない私たちをよそに、最後まで普段通りに会の進行を務められたその姿を、決して忘れないよう心に刻んでおきたいと思います。ありがとうございました。

註

- 1) 特集展示「生誕120年 大阪が生んだ異才 建築家中村順平」展（平成19年5月30日～7月9日）、同「中村順平 建築芸術の研究」（平成24年4月4日～5月28日）、同「中村順平と建築芸術教育」（平成27年6月3日～8月3日）
- 2) 『館蔵資料集5 建築家・中村順平資料』（大阪歴史博物館、平成21年）、『館蔵資料集14 建築家・中村順平資料2』（大阪歴史博物館、平成30年）
- 3) 網戸武夫『情念の幾何学 形象の作家中村順平の生涯』（建築知識、昭和60年）
- 4) 同上、p.136
- 5) 「網戸武夫編「先生手稿（文、絵とも）印刷文（A4ファイル）」（檜の会寄贈32・大阪歴史博物館所蔵）所収。
- 6) 網戸前掲書では、芸術祭行進の日付が「春、二月五日」と書かれており、中村のメモと食い違っている。
- 7) 前掲3)『情念の幾何学』、p.233-236
- 8) 網戸武夫「建築家外伝 中村順平 第1回～第34回」『建築知識』（昭和53年4月～同56年8月）
- 9) 昭和戦前期の記念祭の開催状況については、『横浜国立大学工学部五十年史』（田口武一、昭和48年）を参照した。
- 10) 同上、p.221
- 11) 成沢福松「『中村順平忌』の集まり」『水煙会会報』第12号（昭和57年11月）、成沢福松「中村順平先生を偲ぶ催し三つ」『水煙会会報』第13号（昭和58年12月）。ただし、同会HPでは設立を昭和58（1983）年としている。
- 12) 檜の会は、平成21（2009）年に会報発行を中止し閉会となったが、現在も有志により活動は続けられている（同会HPより）。
- 13) 前掲8）、「中村順平のカラースキーム」『建築知識』（昭和56年1月）
- 14) 拙稿「資料紹介 建築家中村順平関係資料（市原隆夫旧蔵）」『横浜都市発展記念館紀要』第16号（令和2年）
- 15) 上記拙稿では、大阪歴史博物館所蔵資料に含まれないものを5点と紹介したが、正しくは3点であった。お詫びのうえ訂正したい。
- 16) 前掲9)『横浜国立大学工学部五十年史』、p.73-75
- 17) その後、原本の所在が確認されたようで、現在は閲覧可能になっている。
- 18) 前掲14)「資料紹介 建築家中村順平関係資料（市原隆夫旧蔵）」
- 19) 「中村順平 横浜国立大学建築学科建築祭の写真アルバム」（平尾榮美旧蔵資料24042・日本郵船歴史博物館所蔵）
- 20) 前掲9)『横浜国立大学工学部五十年史』、p.75
- 21) 前掲3)『情念の幾何学』、p.210
- 22) 前掲9)『横浜国立大学工学部五十年史』、p.75
- 23) 『横浜グラフ』については、横浜都市発展記念館HPのWEB写真アルバム「横浜グラフ」の解説に詳しい。  
URL <http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/WebExh.html>
- 24) 「A4スクラップブック「PROF. NAKAMOURA 2」」（檜の会寄贈46・大阪歴史博物館所蔵）所収。
- 25) 前掲3)『情念の幾何学』、p.278-279
- 26) 酒井一光「建築家・中村順平資料について」前掲2)『館蔵資料集5 建築家・中村順平資料』、p.85-88